

産業建設常任委員会所管事項調査報告書

- 1 実施年月日 令和元年 11 月 14 日（木）～11 月 15 日（金）
- 2 視察場所及び
視察項目 (1) 石川県白山市
ア 企業誘致について
(2) 福井県勝山市
ア 観光の産業化について(恐竜を活かしたまちづくり)
- 3 出席者 大山学委員長、田中志摩子副委員長
委員 長嶋一樹、安藤玄一、山田昌紀、八島満雄

4 視察の概要

◎石川県白山市

(1) 市の概要

石川県白山市は、平成 17 年の松任、美川、鶴来、河内、吉野谷、鳥越、尾口、白峰の 1 市 2 町 5 村が合併してできた市である。面積約 755k m²、人口 113,000 人。人口は、金沢市に次いで二番目に多く、面積は、石川県全域の約 18%を占める県内で一番大きな市である。

県内最大の手取川や白砂青松の日本海などの、山・川・海の豊かな自然に囲まれて、平野部は手取川扇状地の中央部、加賀平野の平坦なところにあたり、豊富で良質な水に恵まれ、米づくり、野菜、果樹などの栽培に適している。

地理的利便性として、道路は北陸自動車道の白山インターチェンジ、美川インターチェンジ、徳光スマートインターチェンジの 3 カ所あり、空路は、市内から車で 30 分のところに小松空港がある。鉄道は、平成 27 年に北陸新幹線が開業、JR 北陸本線により関西、北陸間は年々短縮されている。

(2) 視察の目的

地理的利便性、立地条件、強固な地盤と豊富な地下水といった条件を活かして、市内 17 カ所ある工業団地に、作る製品が全国有数シェアを持つ優良企業の誘致に成功しており、財政的に裏付けされて、住みよさランキング一位を獲得している。

優良企業の誘致に積極的に取り組み、成果を出していることから、伊勢原市も新東名高速道路・伊勢原大山インターチェンジの供用開始を目前にして、インター周辺の土地利用、企業の誘致の参考になる事例として、視察市として選定した。

(3) 視察概要

白山市は、強固な地質を有する地域で、手取川伏流水による良質で豊富な地下水が採取できることから、産業への活用と共に産業構造の多様化が進んでいる。

また、金沢市に隣接しており、働き手の確保の面でも、良好な条件を持っている。

このような地理的、地勢的な好条件を生かして、17カ所の工業団地を整備し企業誘致に取り組んで来た。特徴は、地元の雇用を創出する事と法人税収の確保を重視して企業を選択。現在、電気通信機械、印刷関連製造業やソフトウェア、研究開発部門等、製品が全国的、世界的なシェアを誇る企業の誘致に成功しており、現在、県内の製造業における製造品出荷額は、平成29年度6,314億8,025万円で、平成20年以降県内トップを維持している。

このような企業を呼び込むためには、委託している情報会社が県内や県外の企業にダイレクトメールやアンケートを送ったり、市内企業への設備投資による事業拡大を促すなど、積極的に企業獲得に働きかけを行っている。さらに、市内の優良企業の工場拡大、工場の新設等の投資意欲も盛んであり、整備した工業団地もすぐに埋まるなど、既存企業の規模拡大に向けた相談窓口を設けた成果が現れている。

企業誘致の補助金、融資の特別優遇措置も市内在住者の雇用に対しての補助を手厚くすることなどに力を入れている。

企業からの豊富な税収に裏付けされた施策展開をしており、医療費の18歳までの無料化、子育てしやすい街として、2019年全国住みよさランキング1位を獲得しているなど、企業誘致成功の成果が市民生活の満足度に反映されている。



白山市役所前



白山市議会議場

(4) 主な質疑応答:

Q: 企業誘致にあたり、企業への働きかけはどのようにしているのか?

A: 県外企業に対しては、ダイレクトメールのアンケート調査を情報会社に委託 (500~700 社)。また大都市圏での工業系・産業系の見本市に白山市ブース

を出店し、知名度を上げる活動をしている。ちなみに県外企業に関しては具体的な効果は今のところない。まずは、白山市が「こういうところ」と広く広報することが大事であると考えている。

県内・市内企業の誘致に関しては、地元金融機関の投資・融資担当者や地元建設会社に情報（工業団地の広さなど）を提供しながら誘致活動をしている。また地元企業には、それぞれ関連会社や下請け会社があるので、そこにも併せて情報提供をしている。

Q：税制上の優遇の内容と実績は？

A：企業の税制優遇は3つ

- ①本社機能の地方移転に関しては3年間の税制優遇（5社）
- ②地域未来投資促進法に関して、県の基本計画に基づいて県知事認定された企業については3年間の税制優遇（13社）
- ③中小企業向けに設備投資に対して3年間ゼロにする（126社）

Q：産業市街地をどのように用地替えしたのか？

A：昭和から平成初期までは、農村地域工業等導入促進法で農振の除外をして開発していた。現在は、都市計画法を使って、線引きに合わせて農地を工業用途・商業用途・住宅用途に換えている。

Q：地域の発展に特に取り組んでいる部分は？

A：工業団地を一つ一つ整備している。市内企業に対して目を向ける（設備投資をしたい、生産性をあげたいなどの要望に応えられるように、農政部局、都市部局の連携に努めている）。

Q：地域雇用を進めるために行ったインフラ整備や施策等について

A：工業用地を増やせるだけ増やして市内の企業の拡張なり、市外の企業の誘致をしていく。それぞれの企業の従業員のうち市内からは1/3、市外から2/3。有効求人倍率は2倍。

Q：市と企業が連携して行っていることは？

A：特にないが、それぞれの工業団地で会議体を作っており、年に1回事務局長会議を開催している。その際に企業誘致関連だけでなく、市の施策も伝えている。その時に企業側の要望も聞けるため、大変良好な関係である。

Q：開発に関して、ご苦労した点は？

A：線引き見直しで 5 年スパン、それに景気の波が合うかというのが難しいところ。人口と工業フレームとの関係があり、もともと農業地域ということもあり、農業振興に国費が投入されてきた、農振除外という面でもなかなか難しい。

Q：工業用地の開発において、白山市の農業従事者の意向は？

A：農業従事者も高齢で、跡継ぎ問題も出ている。農地においては集約化を進めている。農業は農業で守っていかなければならない。農地を手放したい従事者も多くいるが、農振除外と結びつかない。

Q：補助金の金額が大きいと考えるが、金額をどういう根拠ではじきだしているのか？

A：市が工業団地を分譲するにあたり、そこに入ってきた会社に 5%の助成金を出す。石川県ではどこも横並びである。

Q：企業を誘致するにあたり、製造業や物流倉庫など対象業種に対し、差別化を図っているのか？

A：地元雇用が図れるところと税収の確保が二本柱で企業誘致を実施している。人の働けない物流倉庫ではなく、流通に関連する物流倉庫ならOK、物を置くだけの倉庫はNG。製造業なり、情報関係はOKとしている。

Q：企業立地室の職員数は？

A：商工課長兼企業立地室長と担当課長と課長補佐が二人、計 4 名。工業団地開発もあり、人員は要求しているが、なかなか難しい。

Q：工業用地の区画整理の指導・監督は誰がやっているのか？

A：企業立地室でやっている。

(5) 視察の考察 (所感)

白山市は、地理的利便性、立地条件、強固な地盤と豊富な地下水といった条件を活かして、市内 17 カ所ある工業団地を整備して、作る製品が全国有数シェアを持つ優良企業の誘致に成功しており、財政的に裏付けされて、住みよさランキング 1 位を獲得している。

県内からの企業はもとより、優良地元企業による工場拡張、新たな工場の建設といった好条件のもとに、工業団地内に積極的に投資意欲が見られる。

企業誘致に関しては、県外企業へのダイレクトメールの発送、情報関連会社を通じてのメッセージの発信といった対応を取っているが、県外企業の具体の

効果は、あまりないのが現状のようである。

地元金融機関を通じて、県内、近隣企業への情報提供、地元企業を通じて、下請けや関連企業へのアプローチが効果的との回答を得た。このことは、効果を上げるには、地元企業との密接な情報共有と共に、顔の見える付き合いを普段から心がけることが大切であることを思い知らされた。さらに、市内既存企業の規模拡大の相談体制の充実といった、足元を見つめなおした施策展開が求められる。

伊勢原市においても、東部第二、伊勢原・大山 IC 周辺の土地利用において、優良企業にいかにして来てもらえるのかが課題である。そのためには、インフラの整備のみならず、伊勢原市の将来像といった、企業へのアプローチの仕方、情報提供のあり方とともに、顔の見える付き合いの中から生まれる信頼関係を大切にしなければならない。

◎福井県勝山市

(1) 市の概要

福井県勝山市は、福井県の北東部に位置し、市の中心は福井市の東方約 28 km の地点にあり、東南は大野市、西南は福井市、北西は坂井市、北は石川県に隣接し周囲を 1000m 級の山々に囲まれている。市街地は九頭竜川の流れに沿って形成された河岸段丘に位置する田園都市である。

(2) 視察の目的

勝山市の観光の産業化ということで、恐竜を活かしたまちづくりを行っている。年間来場者 100 万人の県立恐竜博物館を核とし、料亭跡地の建物を取得、令和 2 年完成予定の道の駅の 3 拠点を一元的にマネジメントし、回遊ルートを整備して、商工会議所の発議で設立した勝山市観光まちづくり株式会社が運営。観光客を街中に呼び込むような観光振興施策を展開している。

伊勢原市においても、観光が施策の大きな柱となっているが、比々多地区、日向地区などの観光資源を有効に活用できない現状がある。

観光を核とした街づくりを行うには、周遊コースを提示して、観光客の滞在時間をいかに伸ばすか、市内における土産物、物産等の消費を伸ばしていく施策展開が求められる。そのための拠点整備、交通網の整備、それと共に民間の知恵、資本を活かした中での施策展開について、勝山市の取り組みが参考となる事例であることから、視察市として選定した。

(3) 視察概要

昭和 63 年に手取層群の 1 つ北谷町杉山で、1 億 2 千年前の肉食恐竜の化石等が発見されて以来、平成元年から続けられている福井県の恐竜化石発掘調査事業により、学術的に貴重な恐竜化石が数多く発見されており、これまでにフクイラプトル、フクイサウルスの全身骨格が復元されたのをはじめ、恐竜の卵や幼体の骨、足跡化石なども発見され、全国でも貴重な恐竜化石の宝庫としてクローズアップされている。

平成 12 年、福井県立恐竜博物館が開館。平成 19 年に日本で初めて恐竜の皮膚痕化石が発見され話題となり、平成 30 年 1 月には福井県立恐竜博物館入館数が 900 万人を達成した。平成 27 年「恐竜溪谷ふくい勝山ジオパーク」が日本ジオパークに再認定された。

- ジオパーク市民講演会の開催
- 各種セミナー／観察会等の開催
- 化石発掘体験
- ジオパークガイドの養成

- 精密立体地質模型の活用（研究）
- 公民館単位でのジオパーク学習（社会教育）
- ジオツーリズム

などの教育、体験を通じて、人々が目で見て、肌で感じることができる“地域まるごとジオパーク”を目指した活動を行い、観光の分野だけでなく、教育にも広く取り組んでいる。

そして、エコミュージアムにより発掘された遺産と、まちづくりで育んだ地域の人材を観光振興に生かして、まちなかににぎわいを創出し、地域経済活動の活性化を目指し、多様な観光資源を有機的に結ぶ、人材の育成とネットワーク化を進めるために、平成28年に、商工会議所の発議で設立された「勝山市観光まちづくり株式会社」を中心とした日本版DMOの形成に向けた支援をしている。

観光の産業化の取り組みとして、恐竜博物館を核とし、観光交流センターを併設したジオターミナルが平成30年4月にオープン、旧料亭花月楼の建物を取得・改修して、郷土料理の提供や伝統芸能「勝山左義長まつり」の体験(平成29年4月オープン)。さらに令和2年オープン予定の道の駅の三点を拠点とした観光の産業化を目指して、勝山市観光まちづくり株式会社が、運営を担って、街の中心に観光客を呼び込む施策を展開している。

（4）主な質疑応答

Q：DMOの勝山観光まちづくり株式会社は、どのような人たちが運営しているのか。

A：市役所OB、地元でUターンした男性、および元JTBの女性3人で運営をしている。社長は、勝山商工会議所会頭。
会社の経営は順調に推移している。

Q：株式会社を設立する前の観光に対する市の考え方は。

A：従来は市主体で観光事業を行ってきた。県立恐竜博物館がオープンしてから、来訪者が増えてきた。来訪者が増えるにしたがって、恐竜博物館の市営駐車場の整備に予算をかけなければならなくなり、困っていた。

さらに、市で行う観光施策もマンネリ化してきていた。そのような中、商工会議所からDMO設立の要望があり、商工会議所が51%出資して設立された。最初の仕事は、1億円をかけて旧料亭「花月楼」の取得・改修であった。

Q：令和2年オープン予定の道の駅も株式会社の提案か。

A：市と商工会議所の思いが一致して、整備することとなった。

Q:勝山市観光まちづくりは、DMO の成功事例であるが、キーパーソンはいたのか。

A:発案は、商工会議所。現在は、株式会社が主導している。

Q:観光における集客対象は。

A:恐竜博物館があるため、ファミリー層が多い。白山平泉寺は、高齢者が多く訪れおり、平準化を図っていきたい。また、インバウンドも期待している。

Q:どちら方面からの観光客が多く訪れているのか。

A:大阪、京都などの近畿方面からの客が多い。続いて石川方面。中京及び北関東からも来ている。

Q:インバウンドについては。

A:香港、台湾、タイ、マレーシアなどの東南アジアに力を入れている。市単独では手が回らないので、近隣市等でインバウンド推進機構を組織して対応している。



恐竜を活かしたまちづくりの説明

(5) 視察の考察（所感）

神奈川県による第四の核づくり、日本遺産の認定、大山からの眺望がミシュランガイドの☆を獲得、更に令和元年度に開通する新東名高速道路・伊勢原大山 IC の供用開始といった、伊勢原の観光を取り巻く環境は、大きく変化をとげている。

しかし、観光施策を進めるにあたり、多くの問題点もいまだ未解決である。シーズンに集中することによる駐車場不足、オーバーキャパシティの問題、狭隘な道路、宿泊客の減少、また、観光拠点が大山のみで、他に多く点在している観光資源を活かし切れていない現状がある。

勝山市も、恐竜博物館が年間約 100 万人の集客があるものの、宿泊施設の不足等により、近隣市の温泉地に観光客が流れて、勝山市内での消費額が少ない等の問題も起きている。

その中で、商工会議所の発議と資本による勝山市観光まちづくり株式会社の設立は、中心市街地にいかにして観光客を呼び込むかを示唆していた。三拠点を整備して、入り込み客数を確保するとともに、滞在時間の延長、消費額の増を狙った取り組みは評価に値する。

伊勢原市においても、大山と共に、比々多地区における三之宮比々多神社、日向地区では日向宝城坊を核とした観光づくりが今後求められる。

観光を核とした街づくり行うにあたり、いかに市内消費額を増やすかが今後の課題であり、そのための拠点整備、交通網の整備、それと共に民間の知恵、資本を活かした中での施策展開が求められる。